

(翻訳) クリスティナ・ロセッティ

『王子の旅とその他の詩』より (2) ¹

**Poems from Christina Rossetti's
The Prince's Progress and Other Poems (2)
A Translation and Commentary**

滝口智子 ²

Tomoko Takiguchi

Abstract

This is a Japanese translation of poems selected from Christina Rossetti's second collection, *The Prince's Progress and Other Poems* (1866). Here I offer a translation with commentary of five narrative poems: "Jessie Cameron", "Songs in a Cornfield", "A Bird's-Eye View", "Light Love", and "A Ring Posy".

クリスティナ・ロセッティ (1830-94) の第二詩集『王子の旅とその他の詩』(1866) より五編の物語詩を翻訳し、解説を付した。底本として次の文献を使用する。*The Prince's Progress, and Other Poems* by Christina Rossetti, London: Macmillan and Co., 1866.

ジェシー・キャメロン

JESSIE CAMERON.

「ジェシー、ジェシー・キャメロン

もういちどだけ 聞いてくれ」と彼

「誰かいいひと見つけてね たとえ近所のよしみでも

あなたと一緒にならないわ」と彼女

昼と夜が溶けあうじかん

悲しげに波打つ海辺

日はすっかり暮れて

「ジェシー、ジェシー・キャメロン

愛しているんだ昔から 心から」

「別のいい人見つけてね 近所のよしみでも

あなたと一緒に成れないの」

乙女は天真爛漫で 度胸があつて
こたえはきっぱり はっきりと
貴族にも田舎者にも 物おじせずに
おおむね優しい人柄で
ときに粗雑な物言いで
人を傷つけることもあり
若くほがらかで
幸か不幸か美しく
「前にも言ったと同じこと
何度聞いても同じこと
あなたは自分の道をゆけばいい わたしも自由にやりたいの
好きに生きるからほっといて」

波が打ち寄せ あわ立つ海辺
とおくまで広がる砂浜
おうちが見えて立ちどまる
なおも手をとろうとする彼に
「これがわたしの答なの
お願いわかってくださいいな
心に決めた方じゃない
考えがあるの わたしにも
あなたにはシスやマジ
ケイトなんかがお似合いよ
一緒になっても意味ないわ
あなたとわたしは合わないの」

海辺にふたり 立ち尽くす
海辺にふたり ただふたり
激しさを増す彼のことは
我慢は限度にちかづいた
「ただいちど やさしい言葉をくれないか
ジェシー、ジェシー・キャメロン」
「これ以上言うことなんかないわ」

声ににじんだ彼女の矜持
きっと見返す表情にも
怒りを含む瞳にも
走りだすこともせず
しっかり立ったその足にも

彼にはジプシーの血が流れるという人もいる
その心は狡猾という人もいる
乙女の笑顔を見るために
どんな苦難も乗り越えたけれど
彼の祖母は魔女だったという人もいる
ナイル川の向こうから来た黒い魔女
小径のはたの 小屋のそば
ひそやかな場所に聖像をあがめ
語りかけるという噂
怪しい音を聞かれぬよう
怪しい光景を見られぬよう
夜は出歩かないという噂

かわいそうに ジェシー・キャメロン！
海はひそかに忍び寄り 波がざわめき近づいた
早く帰ってさえいたら --
波が高く 乙女のそばで砕けた
早く帰ってさえいたら --
西の空が燃えるころ
乙女の足は 泡立つ波におそわれた
海は高くのぼる
母親よ 戸口から灯りをともし
あたりをよく照らすがいい
だけどジェシーは 娘は 帰らない
帰ることはない もう二度と

浜辺にふたり 立ちつくす
浜辺にふたり ただふたり
乙女の家はすぐそこに

なのに二度と帰れない
乙女の母は炉辺にいて
鋭いカモメの鳴き声を聞いた
でも暗くなった海辺を
見ることはなかった
あたりに住む人々に
聞こえたひとつの叫び声
空を切り裂く 鳥が激しく鳴くような
聞こえたのはそれだけ

ジェシーは二度と帰らない
もう戻ることはない
恋人の足音も聞こえない
彼も戻ることはない
舟が出て 海や河を探しても
ふたりの死体は見つからず
ふたりの行方はわからない
震える海風だけが
突風を受け飛翔する海鳥だけが
盛りあがる波だけが
彼らの居所を知っている
秘密をすべて知っている

潮が満ちてふたりを囲み
容赦なくふたりを襲い
どうすることもできず
帰れなくなったのか
乙女が心ない言葉を浴びせ
彼をとことん侮辱したのか
さいごにしがみついたのか
だれも知ることはない
彼は乙女を助けようとしたのか 沈めたのか
命を投げ出そうとして 叶わなかったのか
荒れる海に耳をすませても
教えてくれる声はない

死にゆくふたりを見ていたものたちがいた
それは言葉もなくせまる祈りを聞き
彼にこたえる「否」の声を
聞いたように思った
死んだふたりを見ていたものたちは
彼方から届く風のを聞いた
すすり泣きと叫びを聞いた それは
くぐもった声だった
海上で見ていたものたちは そこかしこで
蒼ざめた光を見た
こころに浮かぶ考えのように 訪れては去りゆく
手とも髪ともしれぬ ひかりだった

麦畑の歌

SONGS IN A CORNFIELD.

麦畑の歌をうたおう
小麦が刈りとられ
ひとつ またひとつ
穂束になって落ちてゆく
かわいいレティス うたおうよ
レイチェル、メイも うたおうよ
マリアンだけがうたえない
恋人がここにいないから

どこに行ったの
なぜ帰らないの
碧い海をわたりやってきて
いちにちしかいなかった
ふかい碧い海をわたり
干し草づくりを手伝った
金いろの巻き毛

灰いろの瞳
楽しそうに笑って
やさしい言葉をくれたのに
どこに行ったの
なぜ帰らないの
今日 それとも明日
きっと帰ってくるわ
急いでくれたら嬉しい
ぐずぐずすれば哀しい
今日泣いて待つひとは
明日は泣いていない
哀しくてたまらずに
今日いちにちを泣きくらし
今夜眠りにつけば
明日は目覚めないかもしれない

メイはうたった レイチェルと
日ごとに暖かくなる季節
レティスも声を合わせ
さんにん一緒にうたった --

「陽ざしをあびて
小麦を腕にかかえて
小麦を胸に抱きしめて
だけど偽りの愛は手放して
小麦畑に
夏の陽ざしはあつく
小麦畑に
夏の風が吹き
小麦畑に
夏のお友だちがあらわれ
小麦畑に
夏の麦が育つ
だけど冬になれば
夏の陽ざしがなくなれば

夏の風向きが変われば
夏のともだちが去れば
夏の小麦がのこる
しろいお菓子とパンがのこる
小麦を手にとり抱きしめよう
乙女と鳩の食べものを
小麦を胸にいだこう
偽りの愛は手放そう」

昼の熱とひかりが
はたらく乙女を静かにつつみ
農夫の犬が眠りからめざめ
緑いろの蛇がとぐろを隠す
草が繁り 鳥と動物たちが
日陰をもとめ
麦刈りの男女は手をとめて
その場に腰をおろした
一休みして軽い食事をとった
こちよい休息

こうしてみんな休んだ
鎌をわきに置いて
レイチェルがふたつめの歌をうたった
ため息交じりの歌を

「燕が飛び去る
追いかけてゆきたい
燕よ急がずとどまって
道を示しておくれ
燕よふりかえり 戻ってきて 行かないで

燕が去った
追うことはできない
道順もわからない
機会はうしなわれた

燕よさようなら あかるい日の燕よ かしこい鳥よ

燕が去れば
楽しいこともすべて去る
決まったとおりに
わたしたちだけがとどまり
追ってはゆけない さようなら燕よ すてきな鳥よ」

不安げにマリアンが頭をあげた
頭を揺らす穂東にかこまれて
もっときれいな声でうたった
哀しむようにうたった
いつもよりずっときれいな声で
頭を揺らす穂東にかこまれて
願いと哀しみをうたうその歌に
みんなが耳をかたむけた

「うちつける霜より深く
いてつく霜より深く
昼も夜も 深く眠りにつく
わたしたちの喜び

苦しみにさまたげられず
朝がきても目覚めない眠り
すわりこんで泣く者がいても
やぶられない眠り

そこは暗いの 明るいの？
雪ふるように冷たいの？
緑の草が日ごとに育つの
ゆっくりと育つの？

そこは冷たいの あたたかいの？
死のように冷たいの？
息のない世界は

死のように寒いのか？」

今日彼が来たら

乙女が泣いているだろう

明日彼が来たら

乙女が眠っているだろう

次の日に来たら

乙女はどこにもいないだろう

彼は巻き毛の頭をかかえ

胸をたたき呼びつづけるだろう

鳥が見たこと

A BIRD'S-EYE VIEW.

大鴉が鳴く

「こお、こお、こお」

曲がった樹の枝にとまり

ガラガラ声で鳴く

花嫁がその声を聞かないよう

おどかして黙らせ

見つけだし追いだそう

目つきの不吉な大鴉を

なおも櫛の木から吊いの鐘のように

「こお、こお、こお」

死を呼ぶ漆黒の鳥が鳴く

誰が聞こうと聞くまいと

「波の上にたかくのぼる

命と香料を積む船よ

沈め、沈むのだ」大鴉は叫ぶ

「花嫁が天に昇れるよう」

はるかな異国の地で

波の打ち寄せる砂浜で
ひとびとが心配そうに
きらめく海の水を遠く見つめ
「妹が心配だ 抱きしめたい」
三人のきょうだいと言う「ああ もう見えなくなった！」
「娘にくちづけを！」
父と母のため息が海をわたり

船は疾くはしる
絹の旗を帆につけて
やさしい風が故郷へ船を運ぶ
だが大鴉が高みにとまり
くつくつとほくそえみ 鳴く
こお、こお、こお --
灯火をたかく掲げよう
ごらん花婿よ、花嫁がやってくる

春の大波がうちよせる
丘のふもとの砂浜に身を寄せあい
人びとは心配そうに見つめる
願いをこめて待ちわびて
「比類なき宝を積む船よ
なぜ遅れるのか
長すぎる時がもどかしい
風よ滞らず 強く吹け」

大鴉はやむことなく
悠長に鳴きつづける
単調に同じように
鉄の喉から鳴る鐘のように
「父も母もなく
わたしには黒い兄弟だけ
かれは海がどこへ流れゆくかを知る
かれにもわかっている」

昼も夜も 人びとは
やつれた蒼白の面を向けて待ちつづけた
夜も昼も 人びとは
風のように走る船の到着を
花嫁と侍女たちの到着を
-- 祝婚の鐘のあかるい音を --
永遠に姿を見せない
帆を高くあげた船を。

どちらの岸边にも
口にできない疑いに押しつぶされ
哀しみに泣く者 だまって耐える者がいて
笑う者も眠る者もなく
めざめてただ泣いている
いくつもの朝を
絶望でむかえる

だれも知らない
乙女は若くして亡くなったのか
王冠をいただいたまま
女王のように蒼ざめ倒れたのか
しろく冷たい海の泡から
黒く裂けた水底から
天の静かな栄光へと
たちのぼったのか

船は倒れた
乗る者たちも 絹と香料も
偉大な者も小さな者も
すべて落ちていった
天候のせい 流砂のせい
座礁したのか そのすべてか
知るのは大鴉のみ
かれは誰にも明かさない

一年とひと日がたち
祝婚の鐘のあかるい音が鳴りひびく
一年とひと日がたち
勇敢でりっぱな花婿
健全な愛 朽ち果てた信仰
忘れさられた花嫁 ---
二羽の不吉な大鴉
黒く寂しい 彼らだけが覚えている。

軽い愛

LIGHT LOVE.

「僕が来るまで 寂しかっただろう
僕が去ればもっと寂しくなるね
この恋はほんのひととき
かりそめの輝き
雪の荒野に燃える炎のように。
僕が去ったらどうするの
どこで休むというの？
君の休むベッドは冷たい
一年が暮れ逝くころに
朽ちてゆく枯葉のように」

彼女は胸に抱いた子供を
やさしく膝の上で揺らした
「わたしが休むのは あなたへの思いで
ぬくもりの残るベッドよ
思い出が安らぎを与えてくれるの」
そういつて子供にくちづけた
胸に抱いて眠らせた
「死はもっとさびしいでしょう
死ぬことでしか安らぎを見いだせない
そんな人もいるけれど」

「連れ合いをなくした鳩よ きみの歌はさびしい
雛の肌は柔らかで冷たい
昔恋した人がいたならば
もういちどそこに戻り
絹と金の巣をつくれればいい
僕がいなくなっても
蒼ざめた頬を 冷たい肌を
もう一度あたたかな薔薇色にそめて
五月の季節に
夕暮れを昼のひかりに 戻せばいい」

彼女はもう答えず
顔をそむけた
屈辱にさいなまれて
自負心を傷つけられて。
このひとは自分の嘘を自覚していたのね。
子供を抱きしめて
胸につよく引き寄せて
「残酷な恋人など去ればいい
でもこの子とはけっして離れない
わたしとかれの子どもだもの」

「もう僕を悩ませないでおくれ」 彼はあざわらう
「やさしい瞳の娘よ ため息ばかりつかないで
朝になればやってくるのさ ぼくのもとに花嫁が
花ひらくような乙女が
捨てられる前の君のように 花の香りいっぱいの
薔薇のような 桃のような
夜も昼も愛してくれる
手を触れれば震えている
頬を染めて花ひらきそうな乙女が
僕のよろこびはそれを近くで見ること」

「そのひとは陽の光に照らされた薔薇

わたしはしぼんだ枯葉なの？
香りあふれる花の庭に行けばいい
でも葉の落ちた秋の夕暮れに
豊かな収穫があるかしら
愛を ほんとうの愛を置き去りにして
また別の愛を見つけるの？
探しに行けばいいわ でも見つかるかしら
愛を捨てて 別の花をつみとるの？
また踏みつけるだけなのに。

そのひともかわいそうな薔薇
わたしと同じように
捨てられて踏みつけられるのね 雪の中に」
「きみと同じだって？ちがうさ
いたいけな 守られた樹から咲く花だ
さようなら 夢見ておいで 昔のように
ぼくたちふたりが出逢う前のように
駿馬にのってぼくは行くよ はやる気持ちをおさえられないから」
彼女は目をあげた。しっかり天を見あげた
涙は見せずに。「神さまはお忘れになるかしら？」

ポジィリング

A RING POSY.

ジェシーとジルは可愛い娘
育ちがよくて ふっくらして
風にふんわり巻き毛がそよぐ
でもわたしには 巻き毛より
真珠より 愛してくれる人がいる

わたしは少しも可愛くない
やせっぽちで蒼ざめて
まちを歩くとき

ヴェールなんかいらなの
だけど素敵なものをもってるの

ジェスとジルは歌が好き
フルートみたいにきれいに歌う
翼もつ小鳥みたいに踊る
悩みなくほがらかに笑う
でも見てごらんなさい わたしの指にひかる指輪を

ジェスとジルはきつといつか
だれかと一緒になるわ
五月に出会い 六月に熟れてゆく
陽のひかりがあかるいうちに
そしてやさしくゆっくり踊る
だけどやっぱり 先頭をゆくのはわたしなの

解説

「ジェシー・キャメロン」 JESSIE CAMERON.

原詩の一連はそれぞれ 12 行から成り、**abab cbc b dede** の規則的な韻律をもつ（第一連のみ **abab cbc b adad**）。この規則性は、詩の内容と物語の進行に読者を集中させる効果をもつ。詩の語り手は、新聞の三面記事にあるような、海辺の町における若い男女の死亡事故（事件）を語り始める。二人の会話が緊迫し、物語がクライマックスを迎えるとき、二人の死の真相については「誰も知らない」と言う。唯一、真相に近づいている「死にゆくふたりを見ていた者たち」とは、ロセッティの詩に頻出する、名もなき精霊だろうか。語り手はミステリを途中で投げだすことで読者を突き放す。しかし語りの中に手がかりが多く提示されているため、読者は二人に何が起こったかを推論することはできる。ミステリ小説の黎明期に書かれた詩作品として興味深い。

「麦畑の歌」 SONGS IN A CORNFIELD.

三歩格で **abab** の韻を踏む 4 行を重ねて軽やかなリズムで始まる。畑で麦を刈る四人の娘が登場。そのうちの一人マリアンは、恋人が戻らないため、悲しみのあまり歌をうたえない。他の三人の娘が歌をうたう。はたらく男女がしばし手を休め、休息をとる間に、三人のひ

とりレイチェルが一人で歌う。夏の終わりを告げて燕が飛び去ってゆく様子が歌われる。その歌はマリアンの心に響き、これまで歌えなかったはずの彼女が、自身の死期をさとり歌いだす。

娘たちの心情が共鳴し、マリアンの心がゆれ動く様子が、田園風景の描写とともに、繊細な韻律の変化、インデント（行頭）の位置や行の長さの違いによって映し出される。悲しみが沈黙から詩／死を呼び起こす。女性の死が「最も詩的な」主題であると論じたエドガー・アラン・ポーの詩論と通じる（滝口 2010, 103）³が、ロセッティの詩で注目されるのは、女性が共感しあい、客体としてではなく主体として自身の死を歌う点である。

「鳥が見たこと」 A BIRD'S-EYE VIEW.

一連 8 行で aabbccdd の脚韻を踏む。婚礼のために海を渡った花嫁とその従者たち。彼らの遭難の様子を見ていたのは大鴉（Raven）であった。大鴉はしばしば不吉な予言を告げる鳥として描かれる（例：シェイクスピア『マクベス』1,5、『オセロー』4,1）⁴。ゴシック的要素と抒情性に富む作品。最終連では亡くなった姫を忘れ「健全な愛」による結婚をした「勇敢でりっぱな」王子へのアイロニーが印象を残す。

「軽い愛」 LIGHT LOVE.

一連 10 行で全 7 連。ababb の脚韻が二度繰り返され、1 連を作る。救いようもなく不実な元恋人と、彼の子どもを抱く、捨てられた女性の会話。婚外子を生んだ女性は、19 世紀英国の言葉で言えば「墮落した女性（fallen woman）」であるが、この詩は彼女をこのような立場に追いやる男性の不誠実さを浮き彫りにする。

「ポジィリング」 A RING POSY.

4 歩格と 3 歩格が交代し、ababa の脚韻をもつ 5 行連が三つ続き、最終連のみ ababba の 6 行で完結感を作る。おとぎ話の主人公になりそうな美しさもなく、悲劇のヒロインになりそうなく捨てられた状況にもなく、見栄えがしないと自覚する語り手が、きれいな友達を差しおいて一番早く結婚を決めたことにプライドを見出す。当時の女性の幸福についての固定観念が天真爛漫に語られているのか、皮肉を込めて語られているのか、読者によって受けとめ方が異なるだろう。

註

¹ 「(翻訳) クリスティナ・ロセッティ『王子の旅とその他の詩』より (1)」は、『文学と評論』第 3 集第 14 号 (2021 年) 所収。

² 和歌山大学経済学部非常勤講師。

- 3 滝口智子「サッフォーと十九世紀英国の女性詩人たち（1）-- 身投げ伝説と女性の死」
（『経済理論』353号 和歌山大学経済学会 2010年1月 91-105頁）
- 4 『イメージ・シンボル事典』（アト・ド・フリース著 山下圭一郎他訳 大修館書店 1984年）